乙部　延剛

法学研究科・教授

[研究]

活字化された研究成果としては、日本レヴィナス協会の学会誌『レヴィナス研究』に論文(依頼論文)が掲載された。また、『現代民主主義論』(ナカニシヤ出版より近刊)に、闘技デモクラシー論の来歴から今後までを概観した章を寄稿し、まもなく刊行予定である。

また、2024年度は、2024年4月開始の科研費プロジェクト「文化批判と政治理論:キッチュ批判をめぐる政治思想史」(代表・個人)の研究に主に注力した。成果は現時点では未刊行であるものの、2025年5月の政治思想学会研究大会のシンポジウムで報告(依頼)の上、国内の哲学・思想誌に投稿・掲載の予定で準備を進めている。

また、2024 年度に1年間延長した科研費プロジェクト「1920～40 年代日本の技術論:グローバルな知性史の観点から」(代表)についても、資料収集や研究会での研究報告などを行なった。このプロジェクトについては、研究グループとして英文査読雑誌の特集号を企画すべく、投稿先雑誌と協議を進めている。こちらについては、2025 年度中に掲載決定まで進める計画でいる。

[教育]

本年度は修士課程3名の学生を指導し、うち1名が2024年3月に修士課程を修了した。依然小人数ではあるものの、指導を担当する大学院生の数が相対的に増加したことに伴い、集団でのミーティングを週一程度の頻度で儲け、お互いの研究報告の場とするとともに、院生同士、教員と院生間の情報共有の場として活用している。

学部の講義科目「西洋政治思想史」では、コロナ禍以降はじめて期末定期試験での評価に移行したが、課題文献の理解を問う小テストを実施し、また、毎週コメントシートを回収し質問に答えるなど、講義内容の理解を深める工夫を続けている。

学部の演習では、リサーチペーパーを課すことで、受講生の主体的な学習およびリサーチ力の涵養を目指している。本年度は青雲賞に応募する学生はいなかったものの、引き続き青雲賞への積極的な応募を呼びかけていきたい。

[管理運営]

引き続き、全学の人社系オナー教務委員会の教務委員として、発足したばかりのオナープログラムの運営に携わっている。

ほか、全学では引き続きMLE運営協議会の運営に携わっている。

研究科では、研究科教務委員としての業務のほか、欧文紀要OULRの編集委員(編集長)としての業務などに携わった。

加えて、特任研究員としてシドニー大学からアレクサンドル・ルフェーブル教授を迎えてセミナーを開催(2024年12月)したほか、ハヴァフォード大学からパウリーナ・オチョア教授を(2024年4月)、シカゴ大学ロースクールよりザルモン・ロスチャイルド氏を迎えて(2024年5月)、それぞれセミナーを開催するなど、国際的な研究交流イベントの実施に携わった。

[社会貢献]

学会活動として、2024年5月より、政治思想学会の理事をつとめている。また、2025年冬からは、同学会の2026年度研究大会企画委員をつとめている。

また、世界大での政治学者の学会組織である世界政治学会(IPSA)の2025年世界大会(World Congress)の企画に参画し、政治理論セクションの共同チェアを2024年夏からつとめている。

その他、学会に関連した活動として、国内外の査読誌の査読に従事した(3本)ほか、2025年3月の政治哲学研究会の研究大会では討論者をつとめた。

学会以外の活動としては、2024 年夏に国際公共政策研究科の博士論文審査に審査委員として加わったほか、2024 年11月 24 日には長年共同研究を重ねてきた李鴻瓊氏が国立台湾大学文学院で主宰するオムニバス授業「理論と政治」において、講師としてオンラインで登壇し、3 時間の講義を担当した。